

令和3年度農作物有害動植物発生予察情報 発生予報第1号（4月）

令和3年4月7日
山形県病虫害防除所

[概要]

普通作物：いねの育苗期間中の病害発生を防止するため、適正な温度管理、水管理に努めてください。また、生粃殻・稲わら等は、ばか苗病、葉いもちの伝染源になるので、絶対に置床や育苗資材に使用しないと同時に、育苗施設周辺に放置しないようにしましょう。

園芸作物：果樹の生育は全般に早まっています。園内をよく観察し、果樹の生育に合わせて適期に防除を実施しましょう。

りんご黒星病、ももせん孔細菌病、日本なし黒星病の発生はやや多い予想です。生育状況をよく観察し、薬剤防除を徹底してください。散布予定日に、降雨が予想される場合は、降雨前に前倒しして散布するとともに、散布間隔が10日以上あかないようにしてください。

令和3年度発生予報第2号の発表は4月27日の予定です。

予報内容一覧

作物名	病虫害名	発生時期	発生量
いね	ばか苗病	—	平年並
	苗立枯病	—	平年並
	もみ枯細菌病・苗立枯細菌病	—	—
	苗いもち・苗の葉いもち	—	—
りんご	腐らん病	—	—
	モニリア病	—	—
	黒星病	早い	やや多い
もも	キンモンホソガ	—	—
	せん孔細菌病	早い	やや多い
日本なし	黒星病	—	やや多い
おうとう	灰星病	早い	平年並
果樹共通害虫	ナミハダニ（り・も・な・お）	—	—
	ハマキムシ類（り・な・お）	—	—
秋冬ねぎ	ハモグリバエ	—	—

（ ）内 り：りんご、も：もも、な：なし（西洋なし・日本なし）、お：おうとう

山形県病虫害防除所 本所	TEL 023-644-4241	FAX 023-644-4746
庄内支所	TEL 0235-78-3115	FAX 0235-64-2382
山形県病虫害防除所トップページ	http://agr.in.jp/menu/t/790/	
病虫害発生予察情報	http://agr.in.jp/menu/t/563/	

1. 農薬は、農林水産省登録番号のある登録農薬を必要量だけ計画的に購入する。
2. **農薬の使用に当たっては、登録内容（農薬使用基準）を遵守するとともに、隣接地や周辺作物へ飛散しないよう十分留意する。また、使用後は防除日誌の記帳に努める。**
3. 農薬の使用に当たっては、農薬使用者と養蜂家がお互いに連携をとりながら、農薬の使用によるみつばちへの危害を防止する。
4. 農薬は、鍵のかかる専用保管庫に保管し、適切に管理する。
5. 農薬の空容器や空袋等の処理は、廃棄物処理業者に処理を委託する等により適切に行う。

予報根拠中の記号 (+)：発生量を多くする要因 (-)：発生量を少なくする要因

I 普通作物

1. いね

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) ばか苗病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 前年の本田での発生量はやや少ない。(－)
- イ. 向こう1か月の気温は、高いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 浸種中の水温が15℃以上になると感染リスクが高くなるので、水温が上がりやすいハウス内や直射日光の当たる場所での浸種は避け、適正な水温で浸種する。
- イ. 催芽、出芽時及び育苗期間中は適正な温度管理、水管理を行う。
- ウ. プロクロラズ剤耐性ばか苗病菌が県内全域で確認されているので、同成分含有の種子消毒薬剤を使用した場合、今後の発生状況に注意する。
- エ. 温湯浸漬後、直ちに浸種しない場合は、感染抑制のため脱水後十分に乾燥させ、清潔な場所で保管する。
- オ. 催芽前に微生物農薬により種子消毒を行う場合は、十分な防除効果が得られるよう、処理方法及び使用上の注意事項に十分留意する。
- カ. 本田への持ち込みを防止するため、発病苗は見つけ次第抜き取り適切に処分する。
- キ. 育苗資材に籾殻くん炭を使用しない。また、例年、ばか苗病が発生する育苗施設では、育苗器具機材（出芽器、育苗箱等）の洗浄・消毒を徹底する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 苗立枯病 (リゾプス、フザリウム、 ピシウム、トリコデルマ)	平年並

1) 予報の根拠

向こう1か月の気温は、高いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 育苗器具機材（出芽器、育苗箱等）の洗浄・消毒を十分に行う。
- イ. 育苗培土のpHは5.0を目標に矯正する。
- ウ. 苗立枯病の発生を防止するため、育苗期間中は10℃以下の低温、25℃以上の高温にならないよう適正な温度管理を行う。

- エ. 健全な苗を育てるため、床土の水分には十分注意し、過不足のない水管理に努める。
- オ. 灌水や薬液を灌注する場合は、苗の白化現象を防ぐため液温を 20℃前後とする。
- カ. 微生物農薬で種子消毒を行った場合は、薬剤の選定に注意する。

(3) もみ枯細菌病・苗立枯細菌病

育苗期の発生を防止するため、下記の事項に注意する。

- ア. これらの細菌病は、発病後の治療効果がある薬剤がない。例年発生が見られるところで効果のある種子消毒を行っていない場合は、播種前に床土・覆土に薬剤を混和処理するか、播種後覆土前に薬剤防除を行う。
- イ. 催芽、出芽時の高温は感染を助長するので、例年発生が見られるところでは 30℃以上にならないよう温度管理に留意する。
- ウ. 育苗期間中の過度な高温多湿は発病を助長するので、25℃以上の高温にならないよう適正な温度管理を行うとともに、過湿にならないよう水管理を適切に行う。
- エ. 発病が見られた育苗箱の苗は適切に処分する。

(4) 苗いもち・苗の葉いもち

育苗期のいもち病の発生を防止するため、下記の事項に注意する。

- ア. 出芽時に覆土が不完全で糶が露出していると、苗いもちが発生しやすいので、ていねいに覆土する。
- イ. 生糶殻・稲わら等は、葉いもちの重要な伝染源になるので、絶対に置床や育苗資材に使用しない。また、育苗施設周辺にも放置しない。
- ウ. 育苗期に葉いもちが発生した場合は、本田での発生につながるのを見つ次第適切に処分する。

育苗を行った後のハウスで野菜等を栽培する場合の注意点

いねの育苗箱施用薬剤は、育苗箱から地面にこぼれ落ちた場合や、薬剤処理後の灌水等によって農薬の成分が土壌に残留し、後作で栽培した野菜等に吸収され適用外成分として検出されることがある。

このため、いねの育苗終了後に野菜等を栽培する予定のハウス内には、育苗箱施用薬剤を処理した育苗箱を持ち込まない。また、育苗箱施用薬剤を処理する場合は、育苗箱をハウスから搬出した後に処理する。

II 園芸作物

1. りんご

(1) 腐らん病

腐らん病菌の感染を予防するため、雪害による枝折れ等の折損部はきれいに切り落とし、切断面に塗布剤を処理する。

(2) モニリア病

例年発生が見られる園では、発芽 2 週間後～開花直前までに薬剤防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
(3) 黒星病	早 い	やや多い

<3月17日付け 発生速報第2号発表>

<4月5日付け 発生速報第4号発表>

1) 予報の根拠

- ア. 一部の園では前年秋季に感染が確認された。(＋)
- イ. 県予察圃場（寒河江市）の生態調査では、りんご「ふじ」の展葉期は4月3日と早い（平年：4月12日、前年：4月4日）。
- ウ. 伝染源となる前年被害落葉からの子のう胞子の飛散が4月5日に確認された（平成29～31年の平均：4月11日、令和2年：3月22日）。
- エ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 園内をこまめに観察し、生育状況にあわせて展葉期及び展葉10日後の薬剤防除を徹底する。特に、りんごの生育が平年より進んでいるため、防除時期を逃さないように注意する。
- イ. 開花期前後は特に重要な防除時期に当たるので、開花直前及び落花直後の2回、DMI剤（EBI剤）混合剤又はDMI剤に保護殺菌剤（チウラム剤、マンゼブ剤）を加用し散布する。
- ウ. 散布予定日に降雨が予想される場合は、計画を前倒しして降雨前に散布するとともに、散布間隔が10日以上あかないようにする。
- エ. 薬剤散布に当たっては十分な薬液量（400ℓ以上/10a）で、散布ムラが生じないように、ていねいに散布する。
- オ. DMI剤耐性菌が県内で確認されているため、DMI剤単成分剤だけでは散布しない。また、DMI剤の総使用回数は2回以内とする。

(4) キンモンホソガ

前年発生の多かった園では、越冬量が多いと推測されるため、今後の発生に注意する。

2. も も

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
(1) せん孔細菌病	早 い	やや多い

<3月17日付け 発生速報第1号発表>

1) 予報の根拠

- ア. 前年の発生量が多く、越冬伝染源量はやや多いと推察される。(＋)
- イ. 県予察圃場（寒河江市）におけるもも「川中島白桃」の生育はやや早い。
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 風当たりの強い園では防風ネット等を設置する。
- イ. 春型枝病斑や発病葉は見つけ次第摘除し、適切に処分する。
- ウ. 開花前までに薬剤防除を実施する。

3. 日本なし

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 黒星病	やや多い

<3月17日付け 発生速報第3号発表>

1) 予報の根拠

- ア. 前年の発生量は平年並であった。
- イ. りん片越冬量調査では、平均発病芽率は0.5% (平年:0.3%) とやや高い。(+)
 - ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 園内をよく見回り、発病部位(花そう)は見つけ次第摘除し、適切に処分する。
- イ. 開花期前後は重要な防除時期に当たるので、開花直前、落花直後の薬剤防除を徹底する。

4. おうとう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
(1) 灰星病	早 い	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 前年の熟果腐れの発生量は平年並であった。
- イ. 県予察圃場(寒河江市)におけるおうとう「佐藤錦」の生育は早い。
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 開花期前後は重要な防除時期に当たるので、生育状況をよく観察し、風船状開花1日前及び満開3日後に、ていねいに薬剤防除を行う。
- イ. 前年のもぎ残しによる樹上のミイラ果や果梗からの発生が懸念されるので、もぎ残しが多かった園では防除を徹底する。

5. 果樹共通害虫

(1) ナミハダニ(りんご・もも・なし・おうとう)

4月前半の巡回調査では、ナミハダニがりんごの下草で確認されており、一部の園では産卵も確認されている。下草でのナミハダニの増殖を抑制するため、樹幹下(幹の周り30cm程度)は清耕管理を行う。

(2) ハマキムシ類(りんご・なし・おうとう)

前年被害の見られた園では、果樹の生育に合わせて適期に防除を実施する。なお、訪花昆虫を保護するため、薬剤の選定に留意する。

6. 秋冬ねぎ

(1) ネギハモグリバエ

生育初期に寄生されると被害が大きくなる恐れがあるため、早期発見に努め、発生初期から防除を徹底する。

[発生予察情報で使用される時期、量の表現の基準]

1. 時期

平 年 並	平年値（過去10か年の平均）を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
ややおそい	平年値より3～5日おそい
早 い	平年値より6日以上早い
お そ い	平年値より6日以上おそい

2. 量（発生量、発生面積および被害量等）

過去10年間の値を、発生が多い順に下図のように並べ、本年の値との比較により求めます。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
←多い→	← やや多い →	← 平 年 並 →			← やや少ない →			←少ない→	

東北地方 1か月予報（04/03～05/02）		
2021年04月01日14時30分 仙台管区气象台 発表		
向こう1か月 04/03～05/02	天候	東北日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。 東北太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。
	気温	平均気温は、高い確率60%です。
1週目 04/03～04/09	気温	1週目は、高い確率60%です。
2週目 04/10～04/16	気温	2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。
3～4週目 04/17～04/30	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）			
気温	東北地方	向こう1か月 04/03～05/02	
		1週目 04/03～04/09	
		2週目 04/10～04/16	
		3～4週目 04/17～04/30	
降水量	東北地方	向こう1か月 04/03～05/02	
日照時間	東北地方	向こう1か月 04/03～05/02	

低い(少ない) 平年並 高い(多い)